

日本科学哲学会 第51回大会  
シンポジウム「行動に還る—感情・表情・身体動作」全体趣旨  
2018年10月13日(土) 立命館大学衣笠キャンパス

オーガナイザー・提題者：染谷昌義（高千穂大学）  
提題者：河野哲也（立教大学）、長滝祥司（中京大学）、野中哲士（神戸大学）

### 趣旨

今や知覚や認知の本性は、与えられた環境において行動を適切に制御する問題を抜きには考えられなくなった。周囲のあり方の正しい知識に基づいて状況に相応しい行動を論理的に導き出して実行するといった方式は、人間も含め実環境に生きる生物が行動を生成し制御する方略ではない。知覚や認知はもっと直接的かつ密接に行動の制御と結びついている。アフォーダンス理論、オシツオサレツ表象、予測誤差最小理論、二重過程理論といった考え方に共通しているのも、行動の契機を重要視するこうした観点に他ならない。そして昨今興隆を見せる、反認知主義的な「情動の哲学」にも同様の傾向を見て取れる。情動は、喜びや悲しみといった自覚される心の状態というよりも、安全や危険など周囲の価値的な様相を直観的に体の反応として察知し、その場に相応しい行動を動機づけ導く、つまり環境内での適応的行動を生成し制御する心のはたらきと見なされつつある。

本シンポジウムでは、これら「行動に還る」傾向の意味を、特に感情と動作制御に関連させながら批判的に検討し、行動を心の哲学の中心に位置づける可能性を検討したい。いわゆる心の科学の歴史において、行動主義への批判から誕生した認知科学は半世紀を経て行動に回帰している。知覚や認知でさえ、行動制御の手段であるなら、それらは周囲の価値的な様相を察知する感情の一種でもある。行動科学は心理学の別名称として使われることが多い。同様に、行動の哲学が心の哲学の別名となる日も近いのではないか。

提題者の発表要旨は以下のとおりである。

河野は、感情のカテゴリーについて批判的に検討する。感情のカテゴリーの身分を考える立場としては、感情社会学による社会的構成主義と、ダーウィン以来の、ときに脳科学者が支持する生得説とが存在しているが、どちらの立場も感情を「知」や「意（志）」と並び立つような心理的カテゴリーとしている点において誤っている。これに対し感情を行動のアスペクトとしてみる立場があり得ることを提起したい。またとりわけ脳科学や心理学に見られる日常言語の心理的カテゴリーの素朴な実体視を批判する。

長滝は、感情の行動への還元可能性の問題を扱う。心的状態の一典型とされる感情の一部（あるいは多く）は、表情や行動（動作）に表出しているというのが日常の直観である。ゆえに「他人の心は見えない」というデカルト以来の伝統にとって、感情は喉に刺さった小骨のようなものである。感情を身体動作に還元する立場をとることは、デカルト以来の伝統に包括的な説明を与え、心のデカルト主義を新たな段階に導くことになるのだろうか。あるいはそうした還元主義には困難があるのか。これらの問題を検討する。

野中は、さまざまな階層で張り（プレストレス）をもつ身体を媒質とする、マクロなスケールからミクロなスケール（筋—結合組織—骨格系から機械受容器）を結ぶ力学的な情報伝達が、知覚および柔軟な動作生成に対してもつ示唆について考察する。

染谷は、近年注目を集めているテンセグリティ構造に基づく身体論・動作論を紹介し、いわゆる行動の「高次物理学」なる理解が生じつつあることの哲学的意味を考察する。ここでは、身体動作の制御において神経系は、動作を「制御」しているのではなく、身体の物理構造の力学により生じる変形を「調整」しているという見方が提起される。これにより、行動の中枢制御というパラダイムは批判され、指令者や制御者なしでの行動制御観が主張される。またこの観点から感情と行動との機能的関連性も合わせて検討する。